

輪作体系の強い味方 生分解性マルチフィルム



佐瀬洋樹さん(41歳)は、代々続く農家で育ち、現在は農事組合法人千葉産直センターの代表理事を務める父親の安洋さんと二人三脚で農業を営ん



千葉県匝瑳市の農事組合法人佐瀬ファーム(佐瀬洋樹代表)は、水田で特裁米、露地と施設で葉物野菜などを生産している複合経営農家。野菜の周年栽培では作業適期が重なり家族労働が中心のため手が足りない。「生分解性マルチフィルムを取り入れたところ、マルチを剥がす手間を省け、更に、輪作体系の中で使えるので、作付品目の幅が広がったと喜んでいました。

露地野菜2ha、施設野菜1haを経営。繁忙期には臨時パートも雇っている。今回訪問した2月中旬には、サニーレタスやブーケレタス、茎アロココリー(スティックセニョール)が収穫時期を迎えており、忙しい中、手を休めて応対してくれた。「生分解性マルチは、うないこんでも残らないので大助かりだ」と洋樹さん。春先には、露地でトウモロコシ、施設でピ

中では生分解性マルチならば、トウモロコシの収穫後はモアをかけて漉き込んでしまえば済むので、多少コストはかかっても大助かりという訳だ。9月下旬から秋作のレタスの定植が始まるまでの3カ月間で、生分解性マルチは土の中で分解するので気にならない。そもそもトウモロコシ栽培は「輪作体系の中で位置づけている」と安洋さん。深くまで根を張るトウモロコシは溶脱した窒素を吸収し、土を肥沃にする働きがあり、後作の野菜の出来栄を左右する。窒素を固定するマルチ作物の栽培も同様だ。生分解性マルチを使い始めて6年になるが、後作のレタスは大手スーパ

ーマンや枝豆、空豆などの栽培が始まる。トウモロコシ栽培の目安は、2月下旬から4月中旬までに播種し、収穫は6月中旬から7月下旬まで。6月にはピーマンの収穫・出荷時期と重なり、トウモロコシの収穫後にマルチを剥がしている時間が少ない。ただ、取り残すと夏の炎天下で作業をしなくてはならない。また、マルチの後片付けのために臨時パートを雇うのもコストがかかる。こうした

1からも引張りださだ。きっかけは出荷組合からの紹介だったが、今では出荷組合のメンバーの多くが生分解性マルチを使っているという。昨年は6月に播種した落花生でも生分解性マルチを使い始めた。初期生育を早めるためでもあるが、落花生の場合、途中でマルチを剥がす作業があり、その際に株をひっかけて傷つけたり、抜いてしまふのをなくすことができる。「生分解性マルチの方が断然いい」と洋樹さんは太鼓判を押す。生産量で全国一位を誇る千葉県の落花生において、生分解性マルチの普及は今後の品質向上にもひと役買いそうだ。